

読売

教育ネットワーク

社会はまるごと学校——
すべての大人が先生です



2周年フォーラムで講演する関野勝弘・三菱商事アセットマネジメント副社長(当時)の話しに、高校生たちは熱心に耳を傾けた(読売新聞東京本社で)(2・3面へ)

記念特集 読売教育ネットワーク 創設2周年

2周年フォーラム「**未来**」テーマに高校生らが議論 2・3

顧問会議「**主権者教育**」ますます重要に 4・5

大学入試改革フォーラム 思考力・表現力を問う
選抜目指す 6・7

英語プレコン最優秀賞受賞者のインターンシップ報告 8・9 お知らせ・短信 10
リレーエッセー 米マカレスター大学「サッカー・クラブ経営目指して、経済専攻」 11

2016.10
Vol.22

読売教育ネットワーク 創設2周年

企業や大学と小中高校の交流をサポートする「読売教育ネットワーク」は10月に創設2周年を迎えた。参加団体は当初の229から379に増え、コーディネートした出前授業も2年間で80件に達した。9月23日には「2周年フォーラム」が開催され、有識者と高校生たちが活発な議論を交わした。



高校生たちは講師らの話に熱心に耳を傾けた

幸せは人それぞれ



関野勝弘さん

関野さんは、シェールガス・シェールオイルの生産可能エネルギー、人口動態、世界の大学ランキングを示しながら、「今後30～50年間は米国優位の状況が続く」と主張。資源に乏しく、労働力人口も減っていく日本の経済的地位は低下し

ていくと問題提起した。生徒とのグループワークで関野さんが勧めたのは、英語とITを習得すること。「一度しかない人生だから海外に行った方がいい。自身の経験を振り返りながらアドバイスする関野さんに、生徒たちは「幸せって何ですか」と問いかけた。

「他人と自分を比較せず、自分のことは自分で決めること」。そう説いた関野さんは「親やまわりの人が勧める大学や会社に入ったからといって、幸せになれるわけではない」と生徒たちに熱く語った。グループを代表して発表に立った京華高校1年の山口碧仁さん(16)は、「自分が未熟であることを痛感した。幸せは人それぞれだということにも気づかされた」と話した。3年間海外で生活した経験から、政治や宗教について議論しない日本の友人たちに違和感を抱いていたというが、「他人の目を気にしなくていいことも学べた」と笑顔

「紛争地に行けますか」



黒崎伸子さん

黒崎さんは講演で、スリランカやシリアなど紛争地での医療活動の体験を語り、病院も攻撃の対象になっている厳しい現状について説明した。グループワークで黒崎さんはまず、高校生たちに「紛争地に行けますか」と問いかけたが、手を挙げた生徒はゼ

ロ。「安全かどうか不安」「現地の言葉が話せない」など理由を挙げる生徒たちに、黒崎さんはうなずきながら、「難民受け入れについてどう思うか」「紛争はなくなると思うか」など、次々と質問を投げかけた。

生徒たちの意見には、「日本だって昔は紛争があったのに、今はなくなっているね」と語り、紛争のない未来の実現に向けて努力することの大切さを強調した。



グループでの討論の結果を発表する高校生たち



黒崎さんのグループでは、紛争地での支援について活発な議論が展開された

フォーラム参加高校

【埼玉】大妻嵐山／開智

【千葉】市川／東海大浦安

【東京】足立学園／随友学園女子／大妻／かえつ有明

共立女子／京華／渋谷教育学園渋谷／都立小石川中等教育学校

都立国際／本郷／三田国際学園／和洋九段女子

◆3グループに分かれ討論

フォーラムは東京都千代田区の読売新聞東京本社で開かれ、ネットワークに参加する学校、企業関係者や高校生たち約100人が参加した。「未来はどう変わるか」をテーマに、慶應大人工知能・ビッグデータ研究開発センター長の山口高平さん、国際NGO「国境なき医師団日本」前会長の黒崎伸子さん、三菱商事アセットマネジメント副社長(当時)の関野勝弘さんの3氏が講演。その後、参加した高校生44人が三つのグループに分かれ、3氏がそれぞれのグループに加わる形で議論を深めた。

AIとどう付き合うか



山口高平さん

山口さんは基調講演で、コンピュータの高速化、記憶装置の大容量化、ネットワークの広帯域化などによって、人工知能(AI)の研究開発が急速に進み、各国の政府や企業が巨額の投資で開発にしのぎを削っている現状を解説した。

不安視する必要はない

山口さんは「AIにプログラムを作り出す能力はほとんどない。抽象的思考は圧倒的に人間が勝っており、現時点で不安視する必要はない」と強調。その上で、「人とAIがともに進化するメカニズムを作るのがこれからの大きなテーマだ」と語りかけた。

山口さんは「今はAIをどう使うかという『利用知』がまだない。日本は『利用知』でナンバーワンを目指すべきだ。不安だから遠ざけるのではなく、パートナーとして、100人いたら100通りのAIがあるのが理想だ」と訴えた。

読売教育ネットワーク 創設2周年

活動の意義ますます重要に



清家 篤 慶應義塾長



吉田 晋 日本私立中学高等学校連合会会長



老川祥一 読売新聞グループ本社最高顧問

「主権者教育セミナー」を4回開催
老川 学校・企業・団体合わせて229団体でスタートした「読売教育ネットワーク」も、2年間で379団体にまで増えました。この間に、選挙権年齢が18歳以上に引き下げられ、「ネットワーク」の活動の意義もますます重要になってきたと考えられています。

早乙女 参加団体のプロジェクトとしては、慶應義塾大学の岡野栄之医学部長による再生医療特別講義や、順天堂大学・天野篤教授による心臓手術の見学のほか、作家の真山仁さんを迎えた「模擬国会」が渋谷教育学園渋谷中学高校で開催されました。さらに「主権者教育セミナー」を4回開催、高校生も含め合計380人が参加しました。主権者教育の出前授業は読売新聞の記者が全国23の学校を訪れ、計5000人を超す生徒が受講しました。文部科学省と共に

吉田 今回の「主権者教育フォーラム」は親も対象にしていますね。主権者教育は、小さい頃から行った方がいいに決まっているのですが、家庭ではなかなか難しい。そういう意味でも、ぜひ今後も続けていただきたい

清家 「読売教育ネットワーク」の展開で大切なことが二つあると思います。一つは岡野さんや天野さんのような、時代の最先端を行くトップランナーの知識や現場に触れるのは大切

清家 世界的にポピュリズム（大衆迎合主義）の傾向が強まっています。健全な批判精神やメディアリテラシーを持つことが重要です。成功者だけを過度にもてはやすようになり、地道に暮らしている中間層がな

清家 世界的にポピュリズム（大衆迎合主義）の傾向が強まっています。健全な批判精神やメディアリテラシーを持つことが重要です。成功者だけを過度にもてはやすようになり、地道に暮らしている中間層がな

家庭での道徳教育が世の中を劇的に変える

吉田 家庭できちんとした道徳教育をしてほしいですね。家庭教育には大きな責任がある、という観念がかなり薄れてきていて、責任を何でも他に押し付け

るようになっていく。大もとの家庭教育をしっかりとやってもらうだけで、世の中は劇的に変わると思います。

を削られる、というような話ばかり子供にしていたら、健全な公の精神が育ち難いでしょう。

吉田 最近、中学・高校の教員免許のほかに小学校と英語の免許を取ると、就職率は100%

たくさんいました。自分の興味のあることをやってみたいという意識が当たり前だった。なのに今は、とくに目的意識もなく、中学を出たらなんとなく普通科の高校に行き、そして一般大学に進むのが普通になっている。

参加企業、団体、学校数は379に

だ週刊誌で読みました。教師になる資質うんぬんではなく、就職率が高いという意識で書かれていました。

老川 昔は、電車の運転手や、警察官になりたいという子供が

清家 お金を儲けることが良いことだという価値観ばかりだと、地道な職業意識が薄れてしまっている。落ちこぼれてしま

吉田 そういう一つしかレールのない世の中だと、

清家 お金を儲けることが良いことだという価値観ばかりだと、地道な職業意識が薄れてしま

清家 お金を儲けることが良いことだという価値観ばかりだと、地道な職業意識が薄れてしま



読売教育ネットワーク顧問

清家 篤 (慶應義塾長)
吉田 晋 (日本私立中学高等学校連合会会長)
新浪剛史 (サントリーホールディングス社長)
あさのあつこ (作家)

読売新聞グループ本社
老川祥一 (取締役最高顧問・主筆代理)

読売教育ネットワーク
これまでの活動

読売教育ネットワークには10月17日現在、小中高199校、52大学、企業77社のほか、大学機関や公益財団法人など計379団体が参加している。読売ワークシート通信会員でもある教諭と学校司書は8700人を超えている。

◆参加団体

小中高199／大学52／企業77 ほか379

◆読売新聞による出前授業.....306

◆参加企業等による小中高への出前授業.....80

◆主な特別授業

- 「iPS細胞が切り開く新しい医療とは」
岡野栄之・慶應大学医学部長&9校9人
- 「命を預かる覚悟を学ぶ」
天野篤・順天堂大学医学部教授の医療チーム&9校9人
- 渋谷教育学園渋谷中高 vs 作家・真山仁さん
模擬選挙・模擬国会と討論型授業

■18歳の1票 主権者教育セミナー

2015年11月から2016年6月にかけて4回開催。教員や高校生ら380人が参加。

■18歳選挙権アンケート

2016年4～5月に実施。中高生計1万8293人が回答、参院選直前特集として読売中高生新聞で詳報。

セミナーで選挙への関心高まる

参院選直前の6月に開かれた主権者教育セミナーに参加した桐朋女子高(東京都調布市)の今成美菜さん(18)は「セミナーは選挙に目を向けるきっかけになった」と振り返る。新聞の選挙特集やコラムに目を通しはじめ、インターネットで各党の公約も調べた。別の学校に通う双子の姉には投票方法を教え、迎えた参院選。「若者が頑張る環境を作れる人は誰か」という観点から投票した。だが、候補者の主張を見極めることの難しさにも気づいたという。



思考力・表現力を問う選抜目指す

大学入試改革フォーラムに200人参加

大学入試改革をどのように進めるか
議論したパネルディスカッション

■パネリスト

鎌田 薫氏（早稲田大総長）
川村 隆氏（日立製作所前会長）
小林 浩氏（リフールト進学総研所長）
宮本久也氏（東京都立西高校長・全国高校長協会会長）
山口佳三氏（北海道大学長）

■コーディネーター

古沢由紀子（読売新聞東京本社論説委員）



大学入試と高校・大学教育の連携をテーマにした「大学入試改革フォーラム」（読売新聞社主催、文部科学省後援）が9月25日、東京都千代田区の読売新聞東京本社で開かれた。先進的な事例や海外の入試に関する報告、パネルディスカッションが行われ、教育関係者ら約200人が耳を傾けた。

文科省は、2020年度に大学入試センター試験に代わる新テスト「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」を導入予定で、各大学には多面的・総合的な入試への転換を促している。フォーラムでは冒頭、文科省の有識者会議「高大接続システム改革会議」で座長を務めた安西祐一郎・日本学術振興会理事長と鈴木寛・文科大臣補佐官が高大接続改革の意義や趣旨について説明。大阪大の西尾章治郎学長ら4人が独自の入試や外国の入試制度などについて報告を行った。後半は「高大接続をどう進めるか」をテーマにしたパネルディスカッションが行われた。

◆AO入試枠増やす

——文科省が進めている改革をどう受け止めるか。

山口 国立大学全体として、AO（アドミッション・オフィス）入試の枠を3割に増やす目標を掲げた。新テストの実施については、国立大学協会（国大協）の入試委員会が文科省と中

身を詰めている。
鎌田 個性や学習意欲をきちんと評価し、世界標準に合わせたAO型入試が発展するのは必然的な流れ。早大では入学後の成績が最も良いのはAO入試や推薦で入学した学生だ。

川村 日立グループも海外での売り上げが半分で、従業員の4割が外国人。グローバルな人間になることは、非常に大きな要件だ。社会の課題を見つけて出し、解決することが求められる中、知識だけを問う、わずかな得点の差で選抜するような入試が変わればと期待している。

◆評価基準透明に

宮本 AO・推薦入試が増えれば、不合格になった生徒は一般入試で再挑戦することになり、入試が早期化、長期化する心配がある。評価基準の公表など透明性も高めてほしい。

——個別の大学では、どのような改革を進めるのか。

山口 北大では「未来型人材育成選抜試験」の検討を進めている。求める学生像を「北大版コンピテンシー（能力）」として打ち出し、入学後の意欲を測る適性検査的な内容だ。

鎌田 早稲田らしさの源泉は、個性豊かな人が集まり切磋琢磨することにある。地方出身者向けの奨学金とセットで、地元に貢献する学生を対象にした入試も始める。
小林 企業や海外の大学は適性や潜在力を見る。大学入試でも従来型の学力で序列化するのが公平だという価値観を変える必要がある。

◆記述式の採点どうする

——新テストで導入する記述式問題の採点を、出願先の大学が担う案が浮上している。

山口 各大学による採点は一つの選択肢として国大協と文科省の作業部会で検討中だ。年内に方向性を出したい。

鎌田 記述式を導入すれば、高校で文章を書く指導が定着する効果がある。昔は、各大学が手間をかけて記述式の採点をしてきた。必ずしも不可能ではないだろう。

宮本 採点期間を確保するため、にテストの実施時期が早まり、授業が間に合わなくなることは避けてほしい。英語のスピーキングも導入されるが、受験料負担が重くならないよう配慮を願いたい。

◇大学入試センター試験と新テストの比較

※文部科学省の資料などを基に作成

年度	2019年度まで	20年度～23年度	24年度以降
名称	大学入試センター試験	大学入学希望者学力評価テスト(仮称)	
対象 (現在の学年)	中3まで	中2～小5	小4以下
出題方式	マークシートの選択式	マークシートの選択式 +短文記述式(国語、数学)	コンピューターを使った選択式 や記述式を検討
英語の出題	マークシート式 +リスニング	「書く」「話す」テストで外部の民間試験活用を検討	将来的に外部の民間試験に移行することを検討
実施回数・時期	年1回・1月	「選択式」と「記述式」を同時に実施し、 記述式の採点を大学が担う案を検討 年1回	年複数回実施の可能性を検討
成績	1点刻み	記述式は段階別評価の方向	

——新テストは当初、年複数回実施や段階別成績評価が検討された。
小林 多面的・総合的な評価をする上でも、複数回受験できた方がいと思う。複数回受けて大学が設定する段階に達すれば、入学前に留学やボランティアもできる。

「1点刻み」の選抜 変わる期待

事例報告

■多様な人材発掘する仕組み

鈴木典比古氏 国際教養大学長



本学の特徴は、①すべて英語の少人数授業 ②1年間の海外留学 ③多文化共生のキャンパスライフ ④きめ細やかな進路支援 ⑤多様な人材を発掘する入試制度——の五つ。少ない場合は4～5人で授業を行うので、学生が率先して授業をつくりあげなければならない。1年生は全寮制で、留学生と共に過ごすので、24時間英語漬けの生活になる。

一般入試や推薦入試のほか、合格後の4月～8月、海外でのボランティアなど様々なことに挑戦する期間を与えるギャップイヤー入試などがある。高校では、まんべんなく勉強し、新聞やニュースを問題意識を持って読み、日本語でも英語でも書ける文章力を磨いてきてほしい。

■米国の大学は教養教育重視

藤井雅徳氏

ベネッセコーポレーション 英語・グローバル事業開発部長



弊社は高校の様々な教育活動を支援しており、2008年からは海外の大学への進学希望にも対応している。昨年度、ベネッセのサービスを利用して海外の大学に進学した生徒は231人で、今後さらに増えそうだ。

米国では、日本のように難易度順に進学先を決めるのではなく、何を学びたいか、その大学でどんな教育プログラムが提供されるかで決める。教養教育を重視しており、文系・理系両方の科目が学べるのも、日本の生徒には魅力のようだ。

米国の大学入試は、高校の成績や活動の実績、小論文などで多面的に評価する。日本でも大学入試改革を進める上で、参考になると思う。

■高校での活動 総合的に評価

西尾章治郎氏 大阪大学長



大阪大学は、「高大接続」の実践として、高校1、2年生を対象にした教育プログラムを昨夏に開始し、137人が受講した。原則土曜日に授業などを行い、今年4月からはより深い研究を希望する30人が論文作成などに取り組んでいる。

2017年度入試から導入する「世界適入試」は、AO・推薦入試により、入学定員の8%、270人を選抜する。ペーパーテストの成績だけでなく、高校での活動履歴や意欲などを多面的、総合的に評価し、世界を舞台に新しい社会をデザインするリーダー候補を選抜する。入試専門職員の育成や選抜の際の評価方法の開発も進め、入試改革の先駆けを目指す。

■入学後の伸びる力見極める

アリソン・ピール氏

オックスフォード大 日本事務所代表



英国では16歳までが義務教育で、16歳と18歳の時にそれぞれ統一試験を受ける。その成績は大学進学の際に重要だが、すべてではない。オックスフォード大学の授業では大量の課題図書が出され、少人数で議論も行う。厳しい学習環境で結果を出せる潜在力と学問への意欲がある学生を選抜する。論文の提出を求め、適性試験も行う。毎年出願者は1万8000人以上。大学教授が約1万人を面接し、約3200人を選ぶ。質問への正解を求めるのではなく、どう問題に取り組むかを見る。

英国では、試験の点数ではなく、学生の能力を示す多くの情報を、経験豊富な教授が判断した方がフェアだと考える。

スラムで続く地道な生活改善への支援

プレコン最優秀賞の菊池さんがバンコクの格差社会を取材

昨年行われた「第4回全国学生英語プレゼンテーションコンテスト」(主催・神田外語グループ、読売新聞社)で最優秀賞を受賞した南山大学3年の菊池夏子さん(21)が、8月から9月にかけての2週間、読売新聞バンコク支局で新聞記者のインターン研修を受けた。現地のスラム問題を取材した菊池さんのレポートを紹介する。

タイの首都バンコクでは、5人に1人がスラムに住むという。都心のきらびやかなショッピングモールと高層ビル。その目と鼻の先に、1800か所のスラムが存在する。スラムとは、都市部で極貧層が集中して居住する地区のこと。バンコクの中心地を流れるチャオプラヤ川の北東に位置する「クロントイ・スラム」は、中でも最大。約10万人もの人々が、身を寄せ合って生活する。そこにあるのは、急激な経済発展から取り残されたままの貧しい暮らし。そんな住民らの生活環境を改善しようと、支援活動に奮闘する人々がいると聞き、スラムを訪ねた。

1日わずか千円の暮らし

市内の幹線道路から脇道へそれ、高架をくぐる。そこには、華やかな都心とは別世界が広がっていた。活気がある

のは、商店がいくつか軒を連ねる表通りだけ。細い路地を1本入ると、トタンや木材をつぎはぎした小さな家が窮屈そうに並ぶ。その外壁は、線路のすぐそばまで迫っていた。裸足で駆け回る子どもたちと、あばら骨が透けるほどやせ細った野良犬たち。そんな生活の場を分断するように、数時間に一度、列車が通過する。

クロントイ・スラムで暮らすのは、主に近くの港湾地区で働く日雇い労働者とその家族。隣国カンボジアから出稼ぎに來ている人もいる。どちらもタイ社会における最貧層だ。日当わずか千円足らずの収入で日々の生活をやりくりしている。食べていくだけで精一杯で、子どもの教育費にまで手が回らない家庭が多い。そんなスラムの住民たちを支援し、着実に成果を挙げている人たちがいる。

最初に会ったのは、公益社団法人「シャンティ国際ボランティア会」でアジア地域ディレクターを務める八木沢克昌さん。大学卒業後、カンボジアの難民支援ボランティアに携わったのが、この道に入るきっかけとなった。家族とクロントイ・スラムに25年間住み続けながら、支援が続いている。流暢なタイ語で住民と親しげに会話を交わす、50

取材を終えて

タイの光と影を見た

クロントイ・スラムを訪れると告げられた時、正直尻込みした。スラムは、テレビやパソコンの画面を通してしか見たことがない。自分には縁遠い世界だった。「貧困」「不衛生」——ネガティブなイメージばかりが頭に浮かんだ。

実際に足を踏み入れると、そんな予想は裏切られた。表通りにはコンビニエンス・ストアが2軒もあり、コインランドリーもあちこちにある。原付バイクに乗る住民もいた。八木沢さんたちの働きかけによって生まれた、緑あふれる場所がスラムにあるとは、思いもしなかった。

とは言え、想像通りのスラムの姿もそこにはあった。側溝にたまったゴミや泥水が放つ鼻をつくような臭い、ボロボロになるまでサンダルを履きつづいた住民たち……。直前まで、バンコク都心の寒いほど冷房のきいた高級アパートにいた私は、そのギャップの大きさに衝撃を受けた。

タイのスラムに住む人々の現実、ほとんど知られていない。そもそも「タイ」と「スラム」は、日本人には結びつきにくいのではない。「微笑(ほほえ)みの国」というキャッチフレーズのもと、観光地のイメージばかりが先行してしまふ。私もそうだった。しかし、実際には心から微笑むことができない人々が大量にいる。こうした事実を、私も日本人々も、もっと知らなければならなかった。「記者は喜びや感動よりも、悲しみや憎しみと向き合うことの方が多い」。クロントイ・スラムに連れて行ってくれた記者の言葉が、重く胸に響いた。

バンコク支局での2週間のインターンシップを通して、タイの光と影を見ることができた。きっとタイだけではなく、他の国にも、そして日本にも、光が当たる面だけでなく、光の当たらない面があるはずである。そうした影の部分を自分の目で見て、感じ、向き合うことが大切であることを学んだ。

スラムの幼稚園で出会った子どもたちの笑顔を見出しながら、あの子たちを何かの形で支援できないかと考えている。



1.プラティープ先生(左から2番目)と姉のミンボンさん(同3番目)／2.ドゥアン・プラティープ幼稚園の男の子は、カメラを向けると人懐っこい笑顔を見せた／3.狭い路地を挟んで、ぎっしりと家が並ぶ／4.緑が目を引く地区には、ゴミ一つ落ちていなかった／5.スラム各地区の代表者らが参加し、記念式典は行われた／6.クロントイ・コミュニティ図書館で勉強する子どもたち

代とは思えない若々しい笑顔が印象的だった。

路地を花と緑でいっぱい

興味をひかれたのは、タイ政府の支援を受けながら、1998年から4年間行ったという「クリーン&グリーン・リサイクル」事業。「スラムを花と緑でいっぱいにしたい」という思いから始めた活動で、ペットボトルや瓶、ダンボール紙など、リサイクル可能なゴミを住民に持ってきてもらい、花の植木や苗と交換した。

住民が積極的に取り組んだ地区では、次第に緑が増えていった。路地の両脇に植物が植わっている様は、ながらスラムの中のオアシスのよう。緑が増えた地区では、皆ゴミを拾うようになり、軒先の洗濯物も整然と並べるようになったという。「自然と住民の美意識が高まった」とう

れしように話してくれた。

スラムの中には、図書館もあった。八木沢さんも、運営に関わっている。タイ語や英語の本を数多くそろえ、図書館員による読み聞かせも行われている。スラムの子どもたちの多くは、複雑な家庭に育つ。麻薬や売春に手を染める親もいれば、子どもに暴力を振るう親もいる。そんな家庭の子どもたちにとって、図書館は「避難所」の役割も果たしているのだという。「花と緑と本でスラムを変えられる」。八木沢さんの力強い言葉が、心に残った。

スラムの子どもたちを教育面で支える女性もいる。その人は、「ドゥアン・プ

海外支局でのインターン研修

「全国学生英語プレゼンテーションコンテスト」で最優秀賞を受賞した学生は、副賞として、読売新聞海外支局でのインターンシップに参加できることになっている。今回のインターンシップはバンコク支局で行われ、課題は経済発展著しいタイの格差社会を取材すること。菊池さんは、バンコク支局記者の指導を受けながら、クロントイ・スラムやドゥアン・プラティープ財団設立38周年記念式典を取材し、原稿を執筆した。このほか、外国人特派員協会でのパネルディスカッションを見学したり、インタビュー取材に同行したりするなど、記者の仕事を経験した。

ラティープ財団」の創設者で、「プラティープ先生」と、プラティープ・ウンソクタム・秦さん(64)。彼女は、クロントイ・スラムで生まれ育った。「教育こそが子どもたちに必要だ」。若くしてその確信した彼女は16歳の時、姉のミンボンさんとともに、両親が共働きの子どもたちを預かり、勉強を教える活動を始めた。

スラムに幼稚園を創設

以来、幼稚園事業や奨学金制度、青少年育成プロジェクトなどを行う同財団の設立や、上院議員の活動を通して、スラムの住民を支えてきた。その功績が認められ、数々の賞を受賞している。「スラムの天使」として知られる有名人だ。

クロントイ・スラムの中に、同財団が設立したドゥアン・プラティープ幼稚園を

訪ねると、無邪気な笑顔で遊ぶ子どもたちが出迎えてくれた。人形劇や椅子取りゲーム、ダンスなどのレクリエーションに興じる光景は、日本の幼稚園とそっくりだ。両親とも働きに出たり、親が暴力を振るったりする家庭の子ども、幼稚園の中にいれば、一人ぼっちになることはなく、危険な目に遭うこともない。子どもたちはここで、のびのびと成長していくのだという。

同財団の設立38周年を祝う記念式典を見学した。僧侶たちによる読経に続き、プラティープ先生はこれまでの活動を振り返り、関係者に感謝の言葉を述べた。スラムに対する支援の輪が着実に広がりをみせていることに、喜びをかみ締めている。タイ語のあいさつはよく理解できなかったが、そんな晴れやかな笑顔だった。

クロントイ・スラムは今、大きな問題に直面している。スラムがある場所は港湾局の所有地で、政府から立ち退きを迫られているのだ。式典後、スラム各地区の代表者らが集会を開き、解決策を見出そうとしていた。外からの支援に頼るばかりでなく、自分たちの力で現状を打破していくという姿勢が、クロントイ・スラムの未来を変えるかもしれないと思った。

和英翻訳コンテスト高校生特集 優秀賞に飯島彩夏さん



飯島彩夏さん

読売新聞の日刊英字紙ジャパン・ニュースが実施した「和英翻訳コンテスト高校生特集」に、国内外の高校生36人から応募があり、優秀賞に長野県伊那北高校2年の飯島彩夏さんが選ばれました。このほか、佳作2点、努力賞5点も決まりました。

課題となった記事は、夏至の日に東京スカイツリーで行われたヨガのイベントを紹介するもので、展望台の高さの表し方や、長文をどう分

かりやすく表現するかがポイントとなりました。

飯島さんは「塾の先生に薦められて、このコンテストに応募しました。学校では英語部に所属し、ディベートでいつも英語を使っていますが、新聞記事の英訳は初めての経験で、どこまで詳しく訳せばいいのか、どこで文を分ければいいのか悩みました。でも文と文をつなぐ作業は面白く感じました。将来は翻訳や通訳の仕事に就きたいです」と話しています。課題文と飯島さんの翻訳文、ジャパン・ニュース記者による講評は、こちらからご覧になれます。→ <http://the-japan-news.com/news/article/0003217378>

その他の受賞者

◆佳作

並木真衣(東京女学館高2年)

大浦晏奈

(東京学芸大学附属国際中等教育学校・高校1年)

◆努力賞

竹中智咲(横浜雙葉高3年)

荒井公佳(東京・共立女子高3年)

岩井渚沙(大阪府立大手前高1年)

東島 茜(奈良県・聖心学園中等教育学校6年)

津久井南帆(埼玉県立浦和第一女子高2年)

参加者募集 第2回 道徳フォーラム参加者募集

道徳の特別教科化をテーマにした第2回「考え、議論する道徳フォーラム」(文部科学省委託事業)を12月26日(月)午前11時～午後5時、読売新聞東京本社(東京・大手町)で開きます。児童・生徒の評価はどのようになされるべきか、天竺茂・千葉大学特任教授による講演と行政担当者によるパネルディスカッション、小中学校教諭による事例発表、参加者同士での討論を行います。

【応募要領】ウェブ(<https://qooker.jp/Q/auto/ja/y/doutoku/>)か、はがきに〒住所、氏名、年齢、職業(学校種別)、電話番号を明記し、〒150-0001東京都渋谷区神宮前5-42-13 1階「読売・道徳フォーラム」係まで。11月30日(水)必着。定員300人。応募者多数の場合は抽選。12月上旬に入場証を発送します。

【問い合わせ】「道徳フォーラム」係 ☎03・6712・5021



全日本大学ディベート選手権 参加チーム募集

全国の大学生・大学院生によるディベート選手権大会の参加チームを募集します。全日本ディベート連盟ウェブサイト(<http://www.coda.or.jp/>)の申し込みフォームに必要事項を記入の上、「肯定側立論」原稿をメールで送付してください。締め切りは11月5日(土)午後9時。応募が32チーム以上の場合は、原則、先着順。

【問い合わせ】大会実行委員会 メール: all-japan@coda.or.jp

【日程】12月10日(土)、11日(日)

【会場】国立オリンピック記念青少年総合センター
(東京・代々木)ほか

【論題】「日本は一般的国民投票制度を導入すべきである」

主催＝NPO法人全日本ディベート連盟、読売新聞社
協賛＝日本テレビ放送網

「第1回 全国子ども和食王選手権」全国大会 観覧者募集

平成25年に「和食」がユネスコの無形文化遺産に登録されたのを受け、農林水産省は和食文化を継承するための普及活動を行っています。その一環として、11月20日に日本科学未来館(東京都江東区青海2-3-6)で開かれる「第1回全国子ども和食王選手権」全国大会(主催・農林水産省、後援・和食文化国民会議、全国学校栄養士協議会)の観覧者を募集しています。

開催時間12時半～16時半。全国8地区の予選を勝ち抜いた児童が「私の和食」をテーマに発表するほか、和食クイズと実技の競技を行い、「和食王」のタイトルをめぐる競い合います。審査員は、NHK「きょうの料理」などで活躍するタレントの平野レミさんと、2013年の全国学校給食甲子園で優勝した栄養士の松丸奨さんら。「私の和食」の発表については観覧者の投票が審査に反映されます。

定員は300名。参加無料。申し込み締め切りは11月15日。

【申し込み】ウェブサイト → <http://www.washoking.com>



「帰国子女のための学校便覧2017」発刊

海外子女教育振興財団は「帰国子女のための学校便覧2017」を発刊しました。これから出国・帰国されるご家族や海外駐在員家族向けに、帰国後の受け入れ校について調べる際の情報源となるものです。

全国の国公立・私立の小中学校・高校・大学について、帰国子女受け入れ校の情報が網羅されており、2017年度の帰国子女入試に関する出願日や受験日などの最新情報を記載しています。

このほか、各学校の所在地、帰国子女在籍者数、寮の有無、帰国子女の入学・編入学の出願資格・条件、出願書類、募集人員、選考方法、応募状況など基礎的な情報に加え、入学後の指導、卒業生の進路なども掲載しています。

【料金】3,333円(税別)／同財団の維持会員企業・団体が注文する場合は会員価格2,870円(税別)

【申し込み・問い合わせ】

海外子女教育振興財団 事業部 情報サービスチーム

☎03・4330・1349 メール: publish@joes.or.jp





米マカレスター大学
1874年創立の私立大学。学生数約2000人のリベラルアーツ・カレッジで、学生の約14%が留学生。

海外で学ぶ・リレーエッセー ② 米マカレスター大学 「サッカー！クラブ経営目指して、 経済専攻」

県立静岡高校（静岡市）卒、米マカレスター大4年（執筆時）

油井 極高さん



米ミネソタ州セントポールにあるマカレスター大学4年の最終学期になった。これまでを振り返ってみると、人との出会いや交流こそが最も大切な経験だった。私は大学で、極めて努力家の日本人の友人2人に運よくめぐり合うことができた。彼らの平日はたいてい、起床して勉強、受講して勉強、ジムで汗を

流して勉強、それからやまと寝るという徹底的なものだった。一方、私はといえば、起きて二度寝、受講して昼寝、勉強とサッカー観戦をばさんで寝るという日々だった。だから、彼らと過ごしていると、自分がどれだけ怠惰で、無為に過ごしているかを痛感することになった。彼らほどではなくても、モチベーションを持って精力的に生活することが、人生をより豊かにすると知ることができた。

マカレスターで特に気に入っていたことは、お互いの価値観の違いを尊重し合っていることだ。この大学は多文化・国際性を教育の軸に据えており、金銭的な援助の多いことも、入学を決意する理由となった。正直、日本の高校ではみんなが良いと思うようなことに従って生活していた自分がいた。しかし、マカレスターでは本当に自分がやりたいことを追求する学生が多く、多様性の存在を意識でき

る。結果として、自分が人生で本当にやりたいことを実行する覚悟ができた。自問自答を繰り返し、自分のキャリアを捧げる価値があるのはサッカーしかない、と確認した上で、目標を欧州のプロチームでジェネラル・マネジャーとして働くことに定めた。

この目標に近づくため、2年生からスペイン語を学び始めた。スペインでサッカー文化を学ぶためだ。1週間5講座の速習クラスを取って通常2年の語学課程を1年で終わらせた。結果として、スペイン語学習開始から1年半でマドリッド留学のチャンスをつかむことができた。授業は全てスペイン語だった。その生活は夢のようなものだった。レアル・マドリッドのスタジアムから徒歩2分の場所に住み、多くの試合に招待してくれる人物にも知り合えたのは、最高に幸運だった。

現在は次のステップとしてポ



マカレスター大4年生晩餐会での油井さん(右)=本人提供

ルトガル語を学んでいる。それが短期的にはキャリアの足しにならなくても、将来サッカー・ビジネス界で働く助けになるはずだと信じている。大学で徹底的に取り組んだことは、まず経

営コンサルティングを学び、ひいてはプロチームのジェネラル・マネジャーになる、という目標をかなえる役に立つはずだ。（会報編集部抄訳 The Japan News 2016年4月24日）

海外留学を目指す高校生に進学支援を行っているNPO法人「留学フェロウシップ」のメンバーが、海外のキャンパスライフをリレー連載します。留学フェロウシップの詳細はウェブサイト(<http://ryu-fellow.org>)へ。